

20年を迎えたエムズシステム

有限会社 エムズシステム

104-0041 東京都中央区新富2-1-4

http://mssystem.co.jp



聴覚に与えるべき音とは ◆その2

私たちは音についてあまりにも関心が無すぎた、と言えるかも知れない。確かに1,000年も前には虫の音、風の音、衣擦れの音と、繊細な聴覚こそ日本文化の特徴のひとつとして挙げられたのだが。

文：三浦光仁

有限会社 エムズシステム 代表

今や音はあふれ返っている。都市生活者であれば、機械音や人工音から逃れることはできない。いや、それは住む場所を限定せず、私たちの生活に蔓延している。体に入って来るものについては、例えば食べ物にはすぐ関心を払うのに、同じように体に入って来る「音」についてはあまり気にしていない。恐らく最もないがしるにされていると断言できる。

人工甘味料、添加物など一切なし、とうたうことは重要視されているが、人工音、直接音、添加音など一切なしという但し書きを見たことがない。

だからこそヒトは「自然な音」を求めているはずだ。

「気持ちの良い音」といったとき、みなさんはどんな音を思い浮かべるのだろうか。小川のせせらぎ、風にそよぐ葉音、砂浜に寄せては返す波の音。それこそ1,000年前の平安人ではないが、彼らがめでていた気持ちの良い音とは自然の音にほかならない。

それでは、人が作り出す音の中で、気持ちの良い音はあるのだろうか。もちろん素晴らしいヴァイオリンの演奏や、うっとり

するようなテノールの声。確かに気持ちの良い音だが、それはあくまでも「生」の場合で、再生音となった瞬間に、気持ちの良い音という感覚は消え去ってしまうのではないか。気持ちの良い音とは、自然な響き方、自然な聞こえ方のする音と言い換えることができるかも知れない。

指向性の強い直接音は刺激音であり、聴覚を緊張させる。指向性のない、空間に広がる、宇宙に向かって均等に満ち渡る自然な音こそ気持ちの良い音と言えるだろう。

ほとんどの動物は地上で生きていることで（水中空中でもほぼ同様）体内に重力を感じる「平衡覚器」というセンサーを備えている。地球の重力を感じ、どの方向が地球に近いのか、いま自分はどのような位置にいるのかを知るために、感覚センサーとしては生物史的に最も古いのが「平衡覚器」だ。

ヒトはその「平衡覚器」の中に「聴覚」を発達させた。一番原始的なセンサーの中に「聴覚」が出来たせいだろうか、ヒトは哺乳類の中でも「聴覚動物」と呼ばれている。それは、聴覚が生きるか死ぬか、生命を判断する最も重要なセンサーとして機能するためだ。

生まれてから死ぬまで、ヒトの一生で1秒たりとも聴覚が休むことはない。眠っている間は最も情報量の多い視覚を閉じてしまうし、嗅覚も触覚も一旦感覚を得るとすぐにキャンセルできるようになっている。同じ匂いをいつまでも感じることはなく、衣服を着て肌に感じる感触を常に保つこと



はない。味覚は言わずもがな。

しかし、聴覚は寝ている間も、どんな時も、生まれる前の胎児の時も稼働している。24時間、一生死ぬまで敏感に活動している。左右の内耳にはリンパの海が広がりその中に2万4,000本の繊毛センサーが漂っている。外耳から運ばれてくる振動がその海面を打つことで、その周波数に対応した繊毛が揺れ、その組み合わせでこれは「ヒトの声」、「ヴァイオリンの音」と認識するようになっている。この微細で精妙なセンサーに、この生命を委ねている聴覚に対して、私たちは日常的にどんな音を与えるか。

毎秒毎分毎時毎日、継続的に与える音について少しだけでも考えてみるのはいかがだろうか。社会から隔絶するために、ヘッドホンやイヤホンをすることは否定しないが、継続的な使用が私たちの身体や脳にどんな影響を与え続けているかを考えてみるのはいかがだろうか。

そして、それはあなただけでなく、あなたの大切な人にも同じように毎日起こっていることなのだ。

